

現代中国のキリスト教についての一考察

黄 大 衛

An Overview of Christianity in China

Dawei Huang

1. はじめに

つい最近、こういう質問を受けた。「中国でキリスト教が認められるのか?」、「ある団体によれば、中国で聖書はまだ足りなくて、密輸する必要がある、本当か?」「公の建物を持っている教会があるのか」などであった。驚かされた。

これらの質問にまず簡単に答えよう。中国でキリスト教は公に認められている。また、聖書だけではなく、スピリチュアルな分野に関する出版物も沢山ある。更に教会はただ建物を数えきれないほど持っているだけではなく、大きい規模の教会を建てようという傾向もある。例えば、南京市から北へ車で約2時間にある淮安市の中心では、車で約10分の距離を隔てて、2つの大きい会堂の教会がある。一つは5000人の会堂、もう一つは10000人の会堂で、両方とも2000年代後半に建てられたものである。現在、毎日曜日それぞれ5~6000人の礼拝と10,000人の礼拝を守っている。淮安市の人口は530万人だが、キリスト者人数は約30万人(5.7%)といわれる。

本研究に着手した契機は、中国のキリスト教信者の人数に関する疑問を抱いたことであった。情報源の違いによって、信者の数もかなり異なっていた。担当する大学の授業で、中国のキリスト教を取り上げた際に、学生に正しい内容を伝えようということがきっかけとなって、2年前から中国においてキリスト教の現状調査を開始した¹。

調査に着手し、筆者には新しい発見があった。筆者は大陸の教会の出身故、中国の教会をよく知っていると考えていた。しかし、現地調査を進めていく過程で、新しい事実を知り、衝撃を受けた。

筆者が調査に費やした精力と時間は限られており、広大な中国に関する情報は未だ不十分であると思う。その意味で、本稿は、中国のキリスト教に関する端緒的な研究にすぎない。

2. 中国のキリスト教会

以下では、中国のキリスト教会の現況について、①教会の区分、②中国基督教三自愛国運動委員会の成立の意義、③超教派になったプロセス、④教会の構造、⑤合法か不法かの5つの観点か

らアプローチする。

(1) キリスト教会の区分

中国語圏では、キリスト教（「基督教」）と言え、プロテスタントだけである。カトリックは別の宗教として「天主教」と言われる。天主教については、熊本県天草の「大江天主堂」や「崎津天主堂」、あるいは長崎の「大浦天主堂」や「浦上天主堂」が想起される。これは、中国のカトリックでも、昔の日本のカトリックでも、神様を「天の主」としていることに起因する。

信者数は、プロテスタントが1600万人～1億5千万人という多様な説に対して、カトリックの信者数は1000万人が定説になっている。その約半分は政府に公認された教会であり、残る半分は公認されていない教会である。

本研究で取り上げているキリスト教は中国の習慣に沿い、「基督教」、すなわちプロテスタントを指している。なお、中国ではカトリックを「天主教」と呼んでいる。

中国では、2種類の教会が共存し、教会についての呼び方は、①「公認教会」と「非公認教会」、②「三自愛教会」と「家の教会」、③「地上教会」と「地下教会」、④「登録教会」と「未登録教会」の概ね4種類がある。

「三自愛教会」と「家の教会」は事実上の存在している形であり、「地上教会」と「地下教会」は、通常海外でよく呼ばれており、筆者は違和感を強く感じている。また、「登録教会」と「未登録教会」は、現在の中国政府に正式に使われている呼び方である。この呼び方から見ると、なぜ公認されなかった原因は教会側にあると思われる。しかし、現実には、登録の手続きには法律による壁があり、登録できないので、登録するかしないかといったような簡単な問題ではない。

以上の4つの区分のうち、前者の「公認教会」「三自愛教会」「地上教会」「登録教会」は同じものであり、後者も同じものである。

(2) 中国基督教三自愛国運動委員会の成立

中国の教会は、日本では「三自愛教会」と言われることが多い。正式名称は、「中国基督教三自愛国運動委員会」である。

「三自」とは、「自治」「自養」「自伝」であり、三つの「自立」を指している。「自治」とは政治的自立であり、「自養」は経済的自立、「自伝」は伝道での自立である。

中国人民共和国が樹立された1949年当時、世界は東西対立の冷戦時代に置かれていた。中国は西側世界と対立する立場から、キリスト教を「帝国主義の手先」と位置付けた。その結果、当時の中国のキリスト教は全面的な壊滅状態に直面していたと考えられる。

筆者は中国の教会で、次のような教育を受けた。すなわち、従来から中国で土着の教会を目指していた信仰の先輩たちは、当時の周恩来総理と会談し、独自の教会づくりを許可されたと。そして、それが「中国基督教三自愛国運動委員会」の成立の第一歩となった。

中国で公表された資料によれば、最初の1950年7月23日の発起人会のリストは、丁先誠、王世静、王吉民、王梓仲、方叔軒、江文漢、江長川、艾年三、汪彼得、呉高梓、呉耀宗、林永侯、邵鏡三、招観海、胡翼雲、涂羽卿、韋卓民、高鳳山、孫王国秀、凌兪秀靄、崔憲祥、陸志韋、戚慶才、陳文潤、陳芝美、陳崇桂、楊肖彭、趙紫宸、趙復三、熊真沛、鄧裕志、黎照寰、劉良模、劉維誠、鄭建業、鮑哲慶、繆秋笙、檀仁梅、龐之焜、蕭国貴、合計40名であった²。

その後、1951年4月21日に政府が主催した会議で、全国レベルの準備委員会が発足した。主席

は呉耀宗、副主席は涂羽卿、陳見真、陳崇桂、鄧裕志であり、委員は王梓仲、吳貽芳、李寿葆、李儲文、沈德溶、邵鏡三、喻筠、施如璋、韋卓民、敬奠瀛、崔憲祥、趙復三、趙紫宸、鄭建業、熊真沛、劉良模、謝永欽、韓文藻、蕭国貴、羅冠宗の25名であった³。

以上の中国基督教三自愛国運動委員会の成立当初の資料から、当時の時代背景を関連づけると、政府の意向が強く反映されていることが明白である。しかし、現在の日本の教会は殆ど「三自」している。教会は、たとえ海外の伝道母体との繋がりがいくら緊密になっているとしても、多かれ少なかれ、「政治」や「経済」、「伝道」において自立している存在であると言えよう。

(3) 超教派になった経緯

中国では、それに続く1950年代後半に、教会の合併が行われた。これは日本の歴史から学んだのではないかと推測される。日本では戦時下の1941年、政府の強制により、各教派が合併して日本キリスト教団が生まれた。

しかし、注目すべきは、中国でのこの合併は日本キリスト教団のケースより徹底的なものであり、ある意味では激しかった。これは、例えば、熊本で、教派を問わず、二つの「三自愛」に賛同する大きい教会のみを残して、信徒を全部この二つの教会で礼拝させ、他の教会を全部解散させるようなやり方であった。

この1950年代後半の教会の合併によって生まれた不信感や恐怖感によって、教会に行かなくなったキリスト教信者は多数存在した。その結果、教会に行く信者は激減したのである。信仰を隠しているかどうかを問わず、少なくとも、統計上ではキリスト教の信者は大幅に減少したのである。これは勿論当時の中国政府の一つの成果となった。キリスト教の規模を縮小したこの政府の手法は、無神論的唯物主義を強制的に遂行していく立場と合致していたことは言うまでもない。

このようにして廃棄された教会の会堂は政府施設などに転用された。例えば、現在の上海にある中国基督教三自愛国運動会・中国基督協会の本部の建物は当時政府に転用されたものの一つで、10年前にやっと教会に返された。

また合併された教会の牧師たちは転職させられた。当時は「反右派」という大規模な政治運動の渦中にあり、政治的理由で刑務所に入った牧師も少なくなかった。その後、1980年代初頭、彼らは釈放された。その中で、教会の聖壇に戻った牧師もいた。このことから、文化大革命（以下、文革）後は、キリスト教に対する政策が緩和されたことがうかがえる。

このような多難なプロセスを経て、中国では、信仰での一致が実現された。そして中国の教会はこれをきっかけにして、今日に至るまで超教派になった。すなわち、教派はなくなったのである。この信仰での一致に対して、神様に感謝を捧げるキリスト者が多数存在している。

一方、政府の教会規模を縮小する施策に伴って、教会に行かなくなった信者の多くは単に信仰を捨てたのではなく、秘密に礼拝を守るようになった。そこから、「家の教会」も生まれたと考えられる。

(4) 教会の構造

中国の教会は概ね「三自愛教会」と「家の教会」で構成されている。それは①「三自愛教会」、②「三自愛教会」に属している諸集会所、③中立の「家の教会」、④反三自の「家の教会」、⑤政府に認められている「国際教会」、⑥「大学生団契」の6つに分けられている。

このなかで、「国際教会」は、外国人が信仰を守るために設けているものであり、それを踏まえ

た法律が制定されている。一方、「大学生団契」は、現代中国の「非公認教会」の主力になっている。全国のどの大学にも、50人程度のグループが少なくとも4、5個があるようである。因みに、この「団契」は中国教会の専門用語である。例えば、中国教会の「青年団契」は日本語で「青年会」と訳されている。

中国の各地域や地方の教会は多様な対応を取っている。この「大学生団契」は海外の団体が「地下教会」として育てたものである。従って、中国の「地下教会」も1950年代当時の形から大きく脱皮した。年齢層も若くなり、20歳前後の若者が中心となっている。

ここで、「未公認教会」について触れよう。

この種の教会は海外でよく「地下教会」と言われている。26年前、筆者が中国の上海から日本に来た時、東京の華僑系の教会に礼拝に行った。教会員は、筆者が大陸から来たクリスチャンであることを聞いて、すぐ「中国の地下教会からか、または地上教会からか」と質問した。その質問から感じ取った違和感は今でも忘れられない。ここで言う「地下教会」は、教会の実体ではなく、「地下」という秘密状態を指しているのである。しかし、中国では、政府に秘密を保つことは実質的に不可能である。

「地下」には、①政府に秘密、②政府と対抗の二つの意味があると思う。

まず、第一点については、中国は日本や欧米の環境と違い、厳格な制度によって効果的に管理しており、中国の政府には秘密を保っている組織の存在はあり得ないからである。例えば、約10年前に中国で鳥インフルエンザが大流行した。その時、多くの死者が出たが、中国の一番都市上海市では死者がわずかに一桁で抑えられた。しかも、全部市外から入った患者だけだったのである。

なぜだろう？決して偶然でないはずである。筆者には、当時の日本で発行された中国語の新聞の報道がまだ印象に残っている。それによれば、全く中国の「文革」時代に完成された戸籍管理システムを復活したからであるという。当時の1700万人以上の大都市で、日々数十万人の出入りは交通手段も様々だろうと想像できる。だから、一人一人の病状を把握することは困難と思われるが、上海市では可能であった。上海市ではいったん市外から来客があると、どの家でも30分以内に町内会の幹部が必ず体温計を持ってきて測らせたのである。それで、患者は最短の時間で発見され、鳥インフルエンザは大流行には至らなかったのである。

言い換えれば、政府が管理を望むのなら、その管理システムは予想より徹底している。そのような管理システムが発達した国で、一体誰が秘密を保つことが出来るだろう。だから、「地下」は実際に中国ではあり得ない事である。

2012年2月、北京の中国国家宗教局を訪問した時、「中国では、政府が知らないことはない」という筆者の思いを政府の高官に伝えたら、大賛同された。このことから、中国政府に対する秘密が殆ど存在していないことは、政府も認める事実であることが明白である。

それでは、なぜ「地下」という言い方が生まれたのだろうか。それは、中国の現状を全く知らない者による自分なりの想像に基づいた造語であり、言い方である。これに対し、中国に生まれ、長く中国で暮らしていた筆者は、この言い方に非常に違和感を覚え、反対している。以前も、今も、中国の大陸では、「地下」は存在していないのである。

こういうことを聞いたことがある。ある人が中国で秘密に伝道している宣教師を支援している。しかし、支援者はこの宣教師の居場所や活動の内容を知らなかった。なぜなら、中国の政府に対して、秘密を保つ必要があるからである。この支援者はこの理由を少しの違和感もないままに信じている。しかし、筆者はその理由を認めない。

結果としては、この支援団体のメンバーは宣教師の活動について、詳しく知りえなかったとしても、それは中国政府にも秘密であり得たことを意味していない。宣教師は特に外国人であり、目立つからである。鳥インフルエンザの例のように、中国人に対してさえ、情報を確実に把握できるのであるから、外国人に対する場合はなおさらではないだろうか。

その結果、次のような疑問も生じると思う。つまり、「なぜ、宣教師が時に政府に追放され、時に追放されないか？」という疑問である。海外から見ると、これは宣教師が追放されないことは潜伏に成功したからであり、追放されるのは政府に知られた結果だという考えである。

しかし、実態は異なる。宣教師が中国に上陸したその時点で、注視されるからである。追放されないことは宣教師でない装いに成功したのではなく、政府に黙認されたのである。逆に、追放された場合は、政府の黙認のボトムラインを超えたからである⁴。

(5) 合法と不法

次に、政府の「黙認」について考察する。

筆者は中央政府の国家宗教局を訪問した際⁵、「公認教会は合法地帯で活動しているが、非公認教会は不法地帯で活動している」ということを聞いたことがある。

この「不法地帯」とは、よく言われる「灰色地帯」を指している。「灰色地帯」は「合法」より幅広く、活動の余地が多い。しかし、活動する前に、政府のボトムラインを予め知らなければならぬ。ボトムラインをいったん超えた場合は違法になるので、弾圧は避けられないことになる。

その容認度には概ね(1)教会の規模、(2)外国との関係という二つの側面が含まれる。

教会の規模は通常20人～200人位だといわれる。政府は20人以下の団体については殆ど無関心であり、20人～200人の範囲は容認し、200人以上は注意の範囲となり、それ以上は危険と見なすようである。しかし、真偽のほどが明らかでない。

しかし、北京市内には「家の教会」が5,000個あり、それぞれの規模は40人～50人の規模だといわれる⁶。ここで見落とせないことは、この40人～50人の規模という現状であり、それは50人程度の規模が政府に黙認されていることを物語っている。

もう一つの外国との関係については、非公認教会は多かれ少なかれ、外国との関係が強い。例えば、「非公認教会」の指導者を訓練するために、「野地神学校」というようなものがあるが、それは海外の各ボードの企画によって、行われる数日間のものである。「こういうところに行かないでほしい」というアドバイスを地方政府の関係者から受けた「非公認教会」の活動家がいる。このように、「非公認教会」は政府が容認できる範囲において頑張っており、政府に取り締まれた報道が海外でよく伝えられたが、原因はそれである。

逆に、合法である場合は、その行動に“慎み”が要求される。この「三自愛教会」の慎み深さは益々政府の協力者のように見られている。そこにあるのは、協力の行為ではなく、慎む常識であると言えよう。

政府と教会の間に一旦信頼関係が確立されれば、「公認教会」でも余りやり難くないと思う。例えば、文革後、教会が再開して間もなく、ある聖職者は次の日曜日で用意した説教原稿を政府の関係者に予め目を通せた。しかし、この政府関係者はこの聖職者を尊重し、原稿を読まなかったようである。その結果、この聖職者は礼拝において、特別伝道のように、説教の最後で多くの聴衆から信仰の告白を導いた。これは文革後の初めての伝道会であった。勇気がなければ、できなかったはずである。しかし、この聖職者は海外のキリスト教界では、政府の協力者として評判が

悪かったという。

このように、現代中国のキリスト教教会を正しく認識するためには、従来からのわれわれの固定概念や考え方を変える必要がある。

3. 中国キリスト教の現状

中国におけるキリスト教の略史は、表－1の通りである。

このようにキリスト教と長い関わりを有する中国の現状について、①信者数、②信仰の形、③伝道への情熱、④聖書、⑤聖書以外の出版物について、実態調査および聴き取りを実施した。その概要は以下の通りである。

(1) 信者数

中国キリスト教の実際の信者数は筆者にとって最大の関心事であった。しかし、中国は広すぎる上に、キリスト教を取り巻く状況が複雑すぎて、正確な数字を把握するのは不可能に近い。以下では、それに関する様々な統計データを紹介する。

1949年の中国共産党政府樹立当時の統計によれば、カトリックは300万人、プロテスタントは70万人であった。

表－1 中国におけるキリスト教の略史

時 期	出 来 事
唐太宗時代 (626年～)	「景教」(ネストリウス派) 開始、その後衰退へ
13世紀	元朝の成立に伴い、フランシスコ会による宣教が行われた 同時期にロシア正教も伝来したが、民衆に支持を得られなかった
14世紀	フランシスコ会の派遣止めにより、キリスト教は自然消滅へ
1579年	イエズス会の宣教師ミケーレ・ルッジェーリ (羅明堅) が布教のためにマカオに到着
1582年	マテオ・リッチ (利瑪竇) がミケーレ・ルッジェーリに合流
1601～1610年	マテオ・リッチ (利瑪竇) による中国での宣教が開始
17世紀後半	ロシア人コサックによる正教が再度伝来
1773年	イエズス会は典礼論争により解散に追い込まれ、中国での宣教を終える
1807年	イギリス人、ロンドン伝道会の宣教師ロバート・モリソンが来中、プロテスタント宣教開始
1950年	「人民日報」がプロテスタントの「三自宣言」を公表 (9月23日)
1950年代後半	政府の教会合併に基づき合同礼拝が開始
1966年	中国文化大革命開始 (5月16日) による宗教界の弾圧が始まる
1979年	「文革」終了により上海プロテスタント教会再開 (9月2日)
1983年	新しい神学校12校開校
1983年～現在	中国政府によるキリスト教緩和政策が続き、教会は迅速な発展軌道に

出所：筆者作成。

1966年～1979年のキリスト教再開するまでの「文革」の間には、少なくとも表面上は信者数はゼロであった。これはキリスト教だけでなく、どの宗教も同じであった。

今から30年前のデータである1983年の政府の統計によれば、カトリックは400万人、プロテスタントは300万人であった。また、同年、全国で一気に神学校12校が新しく作られた。元々象徴的な存在とされた南京にある「金陵協和神学院」と併せて13校になった。

2010年の「三自愛教会」の統計によれば、全国のプロテスタントの信者は1,600万人であった。これは各教会の教籍名簿に従った統計である。

同年7月の中国人民大学の第7回宗教社会科学年会において、アメリカのパデュー大学(Purdue University)「中国宗教と社会研究センター」が中国人精神生活調査(C S L S)について、次のようなデータを公表した。

中国でクリスチャンと自称するプロテスタントの人数が一番多ければ3,000万人で、全国人口の2.3%を占める。その中で、約38%の人が受洗したようである⁷。

同年8月、「当代中国宗教論壇」で、中国社会科学院世界宗教研究所が全国の31個の省や自治区、直轄市の「入戸調査」に基づいた結果を発表したデータによれば、2,305万人で、全国人口の1.8%を占め、受洗者は1,556万人であった⁸。しかし、このデータは、「入戸調査」、すなわち、人の家に入って行う調査に基づくものであり、被調査者が心配して現実を言わない可能性も高いと思われる。

上記の二つのデータに従って、黄海波⁹は、全国のプロテスタント信者数は2,300万人～4,000万人、全国人口の3%以下を占めるという結論を出している¹⁰。

いずれにせよ、とりあえずこの「2,305万人」と「2,300万人～4,000万人」という二つの数字に注目したい。なお、筆者が中国社会科学院において調査を行なった際、ある調査員の感触では7,000万人台であり、上記のデータに対して、調査員自身は驚きを隠さなかった。言うまでもなく、「三自愛教会」の内部でも、2,305万人という数字に違和感を持つ人がいた。違和感を持つ理由として、この数字がわざわざ5万人まで表示している点を挙げている。このように精確な数字には、納得できないからであろう。

確かに、ランダムなアンケートであり、相手が本音を明らかにしたくないために、嘘を付く可能性も避けられない。だから、中国社会科学院の世界宗教研究所の研究員たちは、2,305万人は最低ラインの数字だったと言ったのであろう。

以上は「公認」教会と政府側の見解である。

さて、このような見方に対して、海外では、中国のキリスト者数についての一番多い言い方は1億5千万人である。それは2011年10月、埼玉県「ニューライフ・ミニストリーズ新生宣教団」を訪問した時に、職員から入手したアメリカからの最新情報であった。従来、中国人口の1割、即ち1億3千万人がキリスト者数であると言われていた。

同じ情報源からもう一つの情報を入手した。それは、(1)海外の宣教パートナーの統計、(2)中国政府の公表数字という二つの統計に基づいたものであった。つまり、海外の宣教パートナーの統計によれば、彼らが把握している「地下」教会の人数は5,000万人であり、そして中国政府の公表した数を合わせれば、中国でのキリスト者の総人数である、という情報であった。そうすると7,000万人になった。この7,000万人という言い方は、「クリスチャン新聞」にも掲載されている¹¹。

また、「朝日新聞」は、「地下教会の信者数は5,000万人を超えたとも言われる」と報じている¹²。このことは、中国での信者の総数が7,000万人に達したことを示唆している。ちなみに、全国の共

産党員の数は8,500万人である。

このキリスト教信者数について、中国では一般的にどのように考えられているであろうか。

まず、中国教会の指導層である。彼らは、政府による「入戸調査」の正式公表数字に従って、「三自愛教会」が公に1,600万人であるという言い方をやめ、2,305万人と同調している。彼らは、これ以外の海外の統計を殆ど認めていない。なぜなら、彼らは根本から「家の教会」の存在を認めていないからである。例えば、2011年1月8日、中国キリスト教会訪日団の記者会見で、三自愛国運動委員会総幹事徐曉鴻牧師は次のように語っている。

「私たちは公認教会（三自愛教会）と家の教会の二種類があるとは考えていません。家で集会をするのには色々な事情が考えられますが、私たちが中国の教会と言う時は、ただ『イエス・キリストを柱とする教会』と考えています。しかし最近では、中国の大学のキャンパスに海外の諸教派から来た人々がいて、教団教派を中国へ持ち込もうとする動きがみられます。ごく少数ではありますが、よくない影響を与えていると思います。・・・但しこれらは少数派で、家の教会の主要なグループではありません」¹³。

また、このような海外における大きな信者数の存在を明らかにした非公式な調査結果について、これを認めない立場の人がおり、次のような疑問を呈している。「ランダム・サンプリングはサンプリングする場所によって、結果も大きく違う。なぜなら、信者は中国の全土で均等に分布しているわけではないからである。だから、多いところに集中すれば、結果も大きくなるし、少ないところに集中すれば結果も小さくなるはずである」¹⁴。

このように、中国のプロテスタント信者数については、さまざまな情報源から、異なるデータが示されている（表－2）。

表－2 中国のプロテスタント信者数の現況に関する諸情報

情報源	信者数
①三自愛教会の統計データ（2010年）	1,600万人
②米国・パデュー大学・中国と社会研究センター（2010年）	3,000万人
③中国社会科学院世界宗教研究所（2010年）	2,305万人
④黄海波・中国社会科学院世界宗教研究所	2,300万人～4000万人
⑤ニューライフ・ミニストリーズ新生宣教団（2011年）	1億5千万人
⑥キリスト教新聞（2011年）	7000万人
⑦朝日新聞（2013年）	5,000万人超

出所：筆者作成。

この点について、筆者は以下の二つの見方を提起しておきたい。

第一に、「公認教会」と「家の教会」の信者の重複の可能性である。信者が両方の教会に出席している場合、重複して統計されることは避けられないからである。第二に、水増しの可能性が高い点である。例えば、「クリスチャン新聞」の報道によれば、40人～50人の「家の教会」は北京だけでも5,000個がある¹⁵。もしそれぞれの教会にそれぞれ2人ずつの誤差があれば、その結果の誤差は10,000人に至る。つまり、誤差は25万人当たり2万人で、4%に達する。

ところで、指導層の他には、中国のキリスト教信者数についてもさまざまな見方がある。

筆者は中国教会を訪問中、「家の教会」で受洗したある信者と偶然に出会った。彼の紹介によって、ある5～6,000人規模の「三自愛教会」には、約三分の一の教会員が「家の教会」出身者であることが明らかになった。彼は中国の信者数を人口の約1割に当たる1億3千万人と見なしている。

また、「家の教会」に対して柔軟な態度を取る「三自愛教会」のある牧師は、全国の信者の総数について、政府公表数字の2,305万人の2倍に当たる4～5,000万人と見なしていた。これに対し、同様に「家の教会」に親しい「三自愛教会」のある牧師は3倍、すなわち2,305万人の3倍で7,000万人であると考えていた。さらに、「家の教会」の活動を熟知しているある活動家は、4倍であると語っていた。

この点について、筆者は、中国のキリスト教信者数は全人口の1割にまだ達していないと考えている。その根拠として、中国におけるキリスト教に対する認知度の低さを挙げることができる。中国を調査旅行中、筆者は出会った多くの人々にキリスト教を話題として持ち出した。ここで注目すべきは、ほとんどの人々においてキリスト教に対する一般的な知識すらゼロに近かったことである。もし、中国で10人に1人～2人がキリスト教の信者であるのなら、その親戚や友達であれば、キリスト教に対する認知度は遥かに高いはずだからであり、そのような実感は到底得られなかったことを述べておきたい。

(2) 信仰の形

次に、現代中国における信仰の形を主題としたい。

前述の徐曉鴻牧師（中国三自愛国運動委員会総幹事）は、「海外の諸教派から来た人々がいて、教団教派を中国へ持ち込もうとする動きがみられます。ごく少数ではありますが、よくない影響を与えている」と述べ、「海外の活発的な秘密伝道に伴い、今まで教派なしの中国の信仰状態は再びバラバラになるのではないかと指摘している¹⁶。徐曉鴻牧師の「中国の信仰状態がバラバラになるのではないかと」という懸念は、筆者にも元々あった。しかし、過去2年間の中国における4回のキリスト教現状調査を行った時点では、この懸念はまだ現実化していなかった。

中国では、「公認」「非公認」の教会を問わず、信仰の形は同じく、福音派的である。「クリスチャン新聞」の記事では次のように述べている。「家の教会はもちろんですが、三自愛教会も殆どは保守的信仰を堅持しています」と¹⁷。その要因として挙げられるのは、従来からの「チャイナ・インランド・ミッション」¹⁸の影響が深く残っているのではないかと思う。

以下、「チャイナ・インランド・ミッション」の影響が見られる中国教会の信仰の特徴、そして筆者が見た教会の現状を述べよう。

中国では一般的に、伝道について、身をもって証することが信者に非常に大事にされている。だから長く信仰を続けていても、身内に信仰を伝えられなかった者にとっては大変精神的負荷がかかる。このほか、祈りも大変重視され、特に癒しなども堅く重んじ、霊的な追求にも情熱的である。「公認」教会のリーダーの紹介によれば、神様は本当に奥地の貧しい信徒たちを恵まれていると感じるそうである。なぜなら、奥地で医療が行き届かない人々に沢山の奇跡が祈りによって実現されたからである。

礼拝は説教が中心である。言い換えれば、神への礼拝よりも、むしろ神からの教えを聞くという印象が強い。筆者は2012年8月、雲南省禄豊県の苗族「章早田」教会を訪問した時、急に説教を頼まれた。説教の長さについて尋ねると、その県の教会の責任牧師はこう言った。

「200人弱の礼拝者の中に、片道で山を歩いて2～3時間もかけて来た人もいる。その人が時間

を費やした価値に合わせなければならない。だから、少なくとも30分は説教してほしい。そうしないと、不満が残る。しかし、長すぎるなら、家に戻って家族の食事を作ることが間に合わない。そうすると、今後、教会に来られなくなる」と。この言葉の中の「時間を費やした価値に合わせる」という言葉は印象的であった。

「公認」教会の礼拝は1時間や1時間半の礼拝では、説教は大体40分か50分である。例外で筆者は70分の説教を体験した。しかも、若者が多い所には、福音派的な礼拝式も流行っている。例えば、杭州市で6000人を収納できる「崇一堂」教会には、日曜日の朝と午前に2回の礼拝が行われている。

1回目の礼拝には約4,000人。年配の人が多いため、礼拝式は伝統的な説教中心である。2回目の礼拝には6,000人満員の状態である。若者が多く、特に20歳前後の人が少なくとも2～3割を占めているので、礼拝式は現代流で福音派的である。つまり、聖壇の上では20歳前後の青年のバンドのリードで、30分程度の讃美と祈りが繰り返される。形は日本の特別伝道集会と似ている。会衆のみんなが立って歌う。手を挙げながら歌う人も少なくない。その後は、牧師たちが登場し、5分間の原稿なしの祈りを始め、説教中心の礼拝が始まる。

ちなみに、この教会のボランティアの人数は1,600人に達しているようである。1回目の礼拝から約半分の人が残って、2回目の礼拝にも出席するので、教会の規模は1万人ではなく、8,000人ということであった。

他の教会での礼拝もそれと似たようなものである。

(3) 伝道への情熱

ここで、中国キリスト教の特徴である伝道への情熱について言及しておきたい。それは、「公認」「非公認」の教会を問わずにある著しい特徴である。

言うまでもなく、「非公認」教会はゼロから始まるので、伝道に熱心であることは当然である。しかし、伝統的な「公認」教会も伝道に大変熱心である。

例えば、「クリスチャン新聞」2011年4月10日、9頁には、「北京崇門堂教会」の写真が掲載されている。会堂は1870年に建てられた教会である。毎日曜日、5回礼拝を行なっている。朝7時、8時半、10時半、午後1時半、夜7時という5回である。礼拝に来ている教会員は6,000人である。これから会堂を拡大しない限り、教会は更に成長することができなくなりそうである。しかし、会堂は国の文化財であるので、簡単に建て直すことができない。今後、どのように教会を成長させていくのかについて、注目したい。

その教会の柳翠敏主任牧師は、筆者にこう語った。「教会は集会所をすでに40個以上作った。しかし、毎週の礼拝には少なくとも200人～300人の新来会者が続いて来ている。だから、信徒に教会の集会所として家を開放できる者を大規模で募集している。計画は、取りあえず毎週1個のスピードで200個の集会所まで作ろうとしている」と。なぜ、毎週1個を作れるのかという質問については、新来会者に説明して、志願者が新しい集会所に吸収される。200人のうち、少なくとも50人が残る。ちょうど50人単位の集会所を作れるという答えであった。そして、集会所200個の目標に達すれば、教会員が1万人加わることになる。しかも、週1個のスピードであるので、その計画を見れば、牧師の情熱、しかも現実的な熟慮が一目瞭然である。

(4) 聖書

日本の「新生宣教団」によれば、中国向きの聖書がこの30年間で、委託印刷を含めて約2,000万冊印刷された。当然のことながら、これらがすべて中国に届いたわけではない。

一方、中国教会は日本を含む世界の聖書協会から当時世界一番先進的な輪転式印刷機を1980年代に寄贈されてから、すでに2012年に聖書印刷1億冊を突破している。それらは中国語の聖書だけではなく、外国語の聖書も多く含まれているが、何を印刷するのかはすべて世界の聖書協会の指示に従っているようである。あわせて聖書印刷の専門用紙も海外から寄贈されている。聖書の売上金は「三自愛教会」の「自養」のための一つの資金源となっている。

ところで、中国では「ギデオン」のような聖書贈呈のための組織は許可されていない。むしろ「三自愛教会」は公にこういう贈呈の仕方に対抗している。理由は聖書を受けた人がすぐ聖書を捨てる可能性が高いからであり、そのような行動はまだ聖書を大量に必要としている人にとって堪えられない現象だからである。だから、聖書の値段は大変安く設定されている。例えば、現在の為替レートで言うと、A5判の旧新約聖書は240円(15元)で、A6判の旧新約聖書は190円(12元)である。その目的が、信者が沢山の聖書を買って、知り合いに贈呈することによって伝道を広めていくためであることは言うまでもない。

しかも、パソコン用の「中国語電子聖書」も安く発売している。

また、一回で大量の聖書を買うことができるかどうかについて、聖書を印刷している「南京愛徳印刷工場」がある江蘇省の聖書販売の責任者に聞いたところ、「多ければ多いほど、歓迎である。割引もし、希望に従い無料配達もする」という答えであった。もちろん、この「配達」は、当局の監視付きではないかと見なすこともできるが、聖書の供給は既にニーズを超えており、聖書についても、他の商品と同様の販売方法が採られていることは当然であろう。

さらに、今回の現地調査で知り得たことは、「三自愛教会」が印刷した聖書やキリスト教関係の本を使っている「家の教会」が少なくないことであり、また、奥地の「公認」教会では、伝道のために、上海本部から無償で届けてきたという聖書やキリスト教関係の本が多く存在するということであった。

(5) 聖書以外の出版物

中国では、聖書のほか、キリスト教関係の本は従来から「三自愛教会」が全部出版している。現在では、説教集や注解書から初心者向きの内容が易しい本など、聖書以外の書籍についても、「三自愛教会」がシリーズで発行している。DVDやアニメ系列の本なども豊富である。

例を挙げれば、聖書物語のDVDセットは13巻でたったの3,200円で発売されている。全部ハリウッドの作品で、言語も中国語に翻訳されている。日本ならば、その中の一巻でそのセットの値段の倍以上である。しかも吹き替えなしの日本語字幕である。要するに、ここでは信徒の信仰上のニーズに合わせて、また信徒の信仰教育のために、教会の出版部門が力を尽くしていることが明らかである。

また、現在の中国では日本と同様、キリスト教の本の出版は教会に限られていない。教会と関係ない出版社もキリスト教の本を発行している。例えば、筆者の手元に『アウグスティヌスの懺悔録』や『イザヤ書の注解書』などがあるが、それらは教会が出版したものではない。しかし一方では、教会の「福音書房」も販売している。ここには、政府の宗教に対する寛容度が表れているのではないだろうか。

「福音書房」は各教会に設けているキリスト教書店であった。教会に自由に出入りし、聖書や本も自由に買える。それにしても、教会の敷居を高く感じる人もいる。その心配を解消するために、福音書房の入り口を道に面して、教会の入り口と別にする流れが流行っている。例えば、全国「三自愛教会」の本部には、大規模の「キリスト教書店」を設けており、出入りがしやすい。また、本部そのものも上海バンド（外灘）の近くにある。通る人が多い所である。このことから、中国のキリスト教が閉鎖的な環境から脱出しようとしていることがわかる。

「福音書房」について、「この10年で、三自愛国教会と関係のあるキリスト教書店も大都市に現れており、中国国内では入手困難だった聖書の類も、その書店や、三自愛国教会の売店でかなり自由に買うことができるようになった」と、クリスチャン新聞は伝えている¹⁹。

4. 課題と展望

本稿では、筆者の2年間にわたる中国の現地調査結果に基づき、現代中国のキリスト教の現状を考察した。

ここで明らかになった点は、中国のキリスト教の迅速な成長・発展が可能になったのはつい最近30年間のことであるという点である。1983年の300万人から、現在の3,000万人～7,000万人までに成長したのである。言い換えれば、この30年間で、キリスト教の信者は10倍、あるいは20倍になったのである。

しかも、キリスト教会を取り巻く環境としての政府の政策も柔軟化の一途をたどっているように思える。20世紀の1960年代の「文革」時代を“真冬”とすれば、今は少なくとも“春”であると言える。そして、たとえ“春”には時々寒流があっても、その寒さは“真冬”の時代の寒さと全然比べられないはずである。

特に、現在の中国政府は、「融和社会」を提唱している。ここにおける融和とは、互いに愛の心を持って平和をもたらす意味であり、胡錦濤（前国家主席）の論調であった。それは「文革」までの「無産階級専政」²⁰による闘う政策とはまさに180度違うものであり、キリスト教が強調している「隣人愛」と合致している。

またいつの間にか、中国のマスコミにも「文革」時代の闘う論調とは対照的に、キリスト教が主張している「愛心」（日本語の「愛」）について取り上げる記事が、従来よりかなり増加した。このような方向で、政府の政策やマスコミの取り上げ方が続いていけば、キリスト教の順調な発展をもたらす環境になってくると考えられる。

さらに、先程触れたように、1983年から中国政府は従来の宗教政策を改め、一気に多くの神学校を作り始めた。現在、中国各地の教会で活躍している牧師のリーダーたちは殆どその時から育てられてきた者である。彼らの努力によって、キリスト教は飛躍的に発展できたと思う。このように、中国教会の迅速な発展はつい最近の25年間に達成された。しかも、この成長のスピードは指数級数になっているに違いない。

従って、筆者は今後、少なくとも今のような状態が続くことができれば、中国のキリスト教はさらに伸びると信じている。楽観的な推測であるが、今後10倍か20倍になるには、今までのように25年間も要しないかも知れない。

一方、このようなキリスト教の伸びに従って、今後10倍か20倍になったら、つまり中国のキリ

スト教信者が3億人か7億人に達したら、中国の国内情勢あるいは世界に対してどのような影響を及ぼすであろうかという点に、筆者は強い関心と問題意識を持っている。

確かに、これまで中国におけるキリスト教の教勢が驚異的に伸びたとしても、日本のわれわれには直接の影響はないと言えるかも知れない。

特に現在のような日中両国の緊張関係の下では、中国に関心がある日本人は5%にとどまるという世論調査結果がある。しかし、仮に遠くない将来、中国でのキリスト教信者が仮に3～7億人に達した場合、隣国である日本の社会、あるいは教会に直接間接の影響がないとは言えないであろう。

日本の教会は今後さらに中国および中国教会との友好関係を目指し、今後前向きな積極的かつ柔軟な対応を行うためにも、中国教会と交流できる環境を整える必要があるのではないかと思う。そして共に宣教協力し世界の平和的な発展のために祈り、奉仕する群れを目指したい。これは、本研究に着手した目的のひとつでもある。

勿論、中国キリスト教の発展を阻害する要因は、数多く残っている。

まず、中国政府は今後ともキリスト教に対して更に柔軟に対応していくのかという疑問である。次に、地方政府の官僚が中央政府の方針を正しく理解し、忠実にこれを実施していくのかについても、注視していく必要がある。また、「公認」教会と「非公認」教会の関係が対立から協調・協力を転換できるのかということも重要な課題である。さらに、海外の教会が中国の教会をどのように正しく応援していくべきかなど、課題は山積している。

本稿には、残された課題は多い。第一に、筆者の2年間にわたる中国現地調査結果についての記述を重視したために、中国のキリスト教およびそれを取り巻く環境としての政府の宗教政策に関する文献・資料の渉猟が必ずしも十分でなかった点である。第二に、アジアの隣国としてキリスト教の教勢めざましい韓国、人口比1%未満の日本等との共通性、異質性についての十分な分析が行えなかった点である。また、中国のキリスト教信者急増の原因や入信する理由などについても詳しく触れていない。これらは大きな課題であるが、今後、本研究の残された使命として取り組んでいきたいと考えている。

注

- 1 現地調査は以下のように行われた。第1回：2011年8月17日～25日、上海にある本部、愛基印刷工場、「沐恩堂」「懷恩堂」教会、杭州の「鼓楼堂」「思澄堂」「天水堂」「崇一堂」教会、南京の江蘇省本部、南京市本部、金陵協和神学院、愛徳印刷工場、「莫愁路堂」「聖保羅堂」教会などを訪問、南京の在建新教会見学。第2回：2011年9月10日～16日、武漢市の教会、湖北省本部、「中南神学院」などを訪問。第3回：2011年10月27日～28日、ニューライフ・ミニストリーズ新生宣教団（埼玉県）などを訪問。第4回：2012年2月21日～28日、北京の中国国家宗教局、中国社会科学院世界宗教研究所、「崇文門堂」「海淀堂」「缸瓦市堂」「寛街堂」「朝陽堂」教会、カトリック用品工場などを訪問。第5回：2012年8月17日～30日、昆明にある雲南省と昆明市の教会本部、「三一堂」教会、禄豊県教会本部と苗族「章早田」教会、福貢県教会本部と研修センター、「古泉王子」教会などを訪問。
- 2 「《中国基督教在新中国建設中努力的途径》 發起人致全国同道的信」、『中国基督教三自愛国運動文選 第一卷 1950-1992』 中国基督教三自愛国運動委員会・中国基督教協会発行 2006年11月 4頁
- 3 沈徳溶『在三自工作五十年』中国基督教三自愛国運動委員会・中国基督教協会発行 2000年6月 8～9頁
- 4 「合法と不法」の項を参照。

- 5 注1の第4回における調査に基づく。
- 6 「クリスチャン新聞」2011年4月10日 9頁
- 7 『B宗教藍皮書・中国宗教報告』 社会科学文献出版社 2011年 129頁
- 8 『B宗教藍皮書・中国宗教報告』 社会科学文献出版社 2010年 191頁
- 9 上海社会科学院宗教研究所助理研究员、当代宗教研究室主任、法学(社会学)博士
- 10 前掲『B宗教藍皮書・中国宗教報告』 2011年 129頁
- 11 「クリスチャン新聞」2011年4月10日 8頁
- 12 「朝日新聞」2013年7月7日 8頁 記事タイトルは「教会内部に奥の秘密党员」
- 13 「Revival Japan」 2011. 1.16 16頁
- 14 注1の第1回調査における聞き取りに基づく。
- 15 「クリスチャン新聞」2011年4月10日 9頁
- 16 「Revival Japan」 2011. 1.16 16頁
- 17 「クリスチャン新聞」2011年4月10日 9頁
- 18 「チャイナ・インランド・ミッション」とは、1865年にハドソン・テラー (James Hudson Taylor) によって設立された「China Inland Mission」(中国内陸伝道教会) という超教派のプロテスタント宣教団を指す。
- 19 「クリスチャン新聞」2011年4月10日 9頁
- 20 「無産階級専政」とは、政府がプロレタリア階級による独裁を正当化する言い方である。